

令和3年8月31日

南の風 2021 インターハイ女子特集号Ⅲ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

少し間が空いてしまいました。特集号Ⅱのつづきです。大阪薫英女学院についてもう一つ触れます。

チームスローガン『奮斗また奮斗 一刻一秒命を張れ!』は、故長渡 俊一監督の遺訓として、今も薫英のチームに引き継がれています。どこか、昭和の匂いがするスローガンで私は大好きです。

次に準決勝を桜花学園と戦い、接戦で惜しくも敗れた京都精華学園についてです。

前半を、桜花34-32京都精華で折り返します。京都精華はスターターに1年生が2人入っています。11番堀内選手、12番八木選手です。(この2人はフルタイムの出場)そしてもう1人15番のディマロ・ジェシカ選手は、18番イソジェ・ウチェ選手(試合開始早々に捻挫してしまう)のバックアップとして、30分の出場でした。堀内選手はPG、八木選手はPF、ジェシカ選手はCのポジションです。

この試合は4Qの終わりまでずっと接戦になります。そして63-63の同点で迎えた残り2.3秒で、桜花の朝比奈選手の勝ち越しのゴール下レイアップが、バスカンとなります。1スローも決まり、京都精華は無念の敗退となったのです。今年度インターハイ女子のベストバウトといえます。

この試合で八木選手は、22得点、11リバウンド(うちオフェンスリバウンド6本)のダブルダブルとなり、得点とオフェンスリバウンド数がゲームハイの成績でした。桜花のディフェンスが、ウチェ選手やジェシカ選手に集中する中、果敢にペイントをドライブで攻めたことや、リバウンドに飛び込む姿は圧巻でした。またジェシカ選手もこの試合、20得点14リバウンドでダブルダブルの大活躍でした。

この2人に、抜群のパスセンスでチームを操る堀内選手を加えたトリオは、この先どこまで伸びるか底知れぬポテンシャルを感じさせてくれました。

最後はベスト4の最後の一角、岐阜女子です。今年の東海大会の決勝で桜花を逆転で下し、インターハイでも第1シードとして優勝候補に挙げられました。

薫英との準決勝は大接戦となり、後半はずっとリードを保っていた岐阜女子は、最後の最後で逆転を許し惜しくも敗れました。大阪薫英女子学院57-56岐阜女子。

岐阜女子は、前半21-23の2点ビハインドで折り返します。後半に入っても一進一退でゲームが推移します。3Qで8番アググアチカ・チュクウ選手の高さを生かしたプレー、6番藤沢選手のシュートで主導権を握り、5点リードでこのクォーターを終えます。4Qに入り、序盤は岐阜女子が少しずつリードを広げるかに見えましたが、薫英が4番都野選手の3Pシュート、6番熊谷選手のバスカン、5番宮城選手のドライブと一気に追い上げます。そして残り50秒、宮城選手のシュートで逆転に成功し、そのままタイムアップとなります。岐阜女子のエース、6番藤沢選手のコメントです。

「最初に相手に流れを持っていかれて、後半は立て直したんですけど、やはり要所のミスが重なってしまって、こういう結果になってしまったかなと思います。」

岐阜女子は藤沢選手がいうように、薫英のターンオーバー9に比べて、20のターンオーバーが致命的だった気がします。岐阜女子にとってたいへん悔しい敗戦となりました。

選手の皆さん、コロナ禍の制約を乗り越え、今年も素晴らしいゲームを見せてもらいありがとうございました。リベンジ、復活、挑戦、連覇、それぞれのウインターカップが楽しみです!!